

公益社団法人水戸青年会議所

2026 年度 理事長所信

公益社団法人水戸青年会議所

第 74 代理事長 大泉 渉

スローガン

挑戦、その先へ

基本理念

変革や失敗を恐れぬ挑戦と決意が未来を創る

基本方針

- 1・新たな視点から次代に飛躍するひとづくり
- 2・暮らす人が誇り、訪れる人が魅了されるまちづくり
- 3・自身の成長を地域社会へ還元できる組織運営
- 4・未来を見据えた健全な財政運営
- 5・時代に即した規律の基で意欲的に活動できる組織づくり
- 6・共感と挑戦で次代を創る拡大アカデミー

【はじめに】

水戸青年会議所は、地域を愛し、地域に根ざし、73年の歴史を積み重ねてきました。その歩みは、いつの時代も「挑戦」の連続でした。高度経済成長、バブル崩壊、震災、そしてコロナ禍と社会の大きな転換点においても、私たちの先輩諸兄姉は立ち止まることなく、その時代に必要な運動を切り拓いてきました。そして今、私たちもまた、新たな挑戦の時を迎えています。多岐にわたる様々な社会課題に正面から向き合い、乗り越える覚悟をもつこと。それこそが、今を生きる私たち青年に課された責任です。「変わらないために、変わる」「守るために、挑む」この想いを胸に、私たちは行動しなければなりません。時代の変化を恐れず、むしろその波を自ら起こす存在として、水戸青年会議所が地域の未来に希望の灯をともし、そのために、私たちは挑戦し続ける必要があるのです。

【未来を拓く多様な学びの場へ】

昨年、50回目を迎えた水戸青年会議所の継続事業として交通安全啓蒙を主軸に開催をしてきた「ちびっ子広場」ですが、多様化が一層進む中で、交通安全啓蒙だけでなく、様々な教育の機会提供が重要です。51回目を機に、新たな学びの機会を提供してまいりましょう。文部科学省が2021年に発表した「社会的・経済的背景に関する調査結果」によると、経済的背景や地域によって、子どもたちが体験する機会に大きな格差が生じていることが示されており、教育的な体験活動や文化的な経験に対するアクセスが限られています。例えば、自然体験やアウトドア活動の機会について、経済的に余裕のある家庭の子どもたちは、キャンプやスキー、旅行といったアウトドア活動に積極的に参加している一方で、低所得層の子どもたちはこうした経験が少ないことが明らかになっています。また、音楽や美術、スポーツなどの文化的活動に参加する機会も、家庭の経済状況によって大きく異なります。自然体験は自尊感情や回復力の発達に寄与し、社会体験は外向性やリーダーシップの形成に関連しています。多様な体験は、子どものもつ潜在的な能力を引き出し、将来的な自己実現や社会的成功に結びつくと考えられています。すべての子どもたちが豊かな体験を得られる環境を提供してまいりましょう。

【子育て支援で築く、未来の大洗】

近年、核家族化の進行や地域とのつながりの希薄化により、子育てが孤立しやすくなっています。特に共働き家庭では、仕事と育児の両立が難しく、育児への不安や負担を感じる保護者が増加しています。また、悩みの内容も多様化しており、保護者が安心して子育てできる環境づくりが大きな課題となっています。さらに、若い世代が地域に定住しにくいという構造的な問題もあります。生活環境や子育て支援が十分とは言えない地域では、出産・育児を機に他地域へ移住してしまうケースも多く、結果として人口減少や地域コミュニティの弱体化が進んでいます。私たちの活動エリアである大洗町でも、全国平均に比べて共働き家庭の割合が高い一方で、育児における孤立感や精神的な不安を抱える保護者

が少なくありません。そうした中、子育てしやすい環境の整備は、地域に暮らす子育て世代の定住を後押しするだけでなく、町外から新たに子育て世代を呼び込むきっかけにもなります。つまり、子育て支援の強化は、今ある家庭を支えると同時に、将来的な子育て世代の「流入」を促進する重要な投資です。地域の魅力や支援制度がしっかり整っていれば、「このまちで子どもを育てたい」と感じる若い世代が移り住み、地域全体の活力につながります。子育て世代が「住み続けたい」「移り住みたい」と思える取り組みを進めてまいりましょう。

【アート×まちづくり】

水戸市は、「水戸芸術館」をはじめとする美術館やコンサートホール、劇場などの現代芸術複合施設を有し、国内外から多くの人々が訪れる文化拠点です。これらの芸術資源は、市民の心豊かな生活を支えるだけでなく、地域活性化の重要な要素となっています。

一方で、水戸市では少子高齢化が進み、若年層の都市部や他地域への流出が続いています。また、地域コミュニティの希薄化や空き家の増加といった社会課題も深刻化しており、地域の持続可能な発展に向けた取り組みが急務です。こうした課題に対し、アートは単なる観光資源や装飾ではなく、「気づき」と「対話」を生み出す力を持ち、地域の課題解決に向けた重要な手段となり得ます。行政、企業、教育機関、市民など多様な主体が連携し、芸術文化の振興とまちづくりを両立させることで、コミュニティの再生や若者の定着、地域の活力向上に寄与していくことが期待されます。私たちは、水戸市のもつ豊かな芸術資源を活かし、地域の課題に真正面から向き合う創造的なまちづくりを推進してまいりましょう。

【地域から世界へ～グローバル人材育成】

世界では、政治・経済をはじめ様々な分野でグローバル化が進み、加速度的に進展をしています。現代のグローバル社会においては、より一層進展する社会を見越し、日本人がグローバルに対応できる力をもつグローバル人材になることが求められています。しかしながら、近年、海外留学する日本人学生が減っていること、海外勤務を望まない若手社員が増えていることなどを理由として、日本の若者のいわゆる「内向き志向」が問題視されるようになってきている現状があります。地域経済を牽引するグローバルな人材を育成していくためには、まちの未来を担う青少年が他国の文化や価値観に触れる機会を提供することが重要です。異文化対応力やコミュニケーション力を高めるとともに国際的視野を広げ、国際協調の精神を育むことにより、国際化の進展する各分野でリーダーシップを発揮することができる青少年を育成してまいりましょう。また、我々は、ASPAC（Asia-Pacific Area Conference）の水戸への誘致を表明していますが、具体的な誘致に向けた活動について改めて考え直す必要があります。誘致には戦略的な取り組みが重要であり、情報収集や分析はもちろんのこと、誘致に向けた具体的なヒト・モノ・カネのリソースがど

の程度必要なのかを明確化し、こういった手法をいつまでに取るべきなのか、現状何が足りないのかをクリアにしていかなければ誘致の成功はあり得ません。戦略的な計画立案を行い、メンバーが共通認識としてベクトルを合わせ誘致に取り組めるような土台を構築してまいりましょう。

【学びを実践へつなぐ組織運営の深化】

事業の成果を最大化させるためには、各会議の設営・運営を円滑に行うのは当然のこと、活発な意見交換ができるよう、スケジュール管理や事前準備が不可欠です。会議時間の厳守のみならず効率的な会議運営を意識して取り組んでいく必要があります。また、諸大会の参加促進も重要です。諸大会でしか学ぶことができない経験や気づきが多くあります。青年会議所は「人生最後の学び舎」と言われますが、互いに切磋琢磨してリーダーとしての資質を高めることを目的とする団体でもあります。学びを自身の会社や社会に還元していくことが何よりも重要なのです。積極的な諸大会への参加を推進してまいりましょう。さらに、近年出向に対するネガティブな印象をもつメンバーが多いように私は感じています。出向でしか得られない体験や経験は意義があり、どうしても画一的になりがちな思考や視点にも変化が生まれ、成長を支援することができるものだと思います。出向について知る機会を積極的に提供し、知らないや無関心を無くしてまいりましょう。

【組織運営と財政基盤の再構築】

公益法人として、法令、定款、社会的規範等を遵守し、誠実かつ透明性の確保された厳格な組織運営を行っていかねばなりません。費用対効果を意識した予算運用を行い、運動の効果を最大化していくためには、各会議体・委員会との連携強化も重要です。より健全な財務規則運営の実現のために、サポート体制の構築が必要です。また、水戸青年会議所は公益法人化を選択し活動をしてきましたが、組織の在り方や時代背景、社会課題、そして価値観が大きく変化をしています。「公益社団法人」から「一般社団法人」へと見直す動きが全国で広がる中、今後どのような形で組織を維持していくのが妥当であるのか常に議論をしていかねばなりません。令和7年4月より新公益法人制度が施行され、制度についてメンバーがしっかりと内容を理解し、改めて公益社団法人、一般社団法人のメリット・デメリットを認識した上で、組織の未来を議論していくことが重要なのです。そして、日本青年会議所では各社飲料メーカーとパートナーシップを組み、寄付型自販機を設置し、寄付金の仕組みを確立しています。我々も共感をいただける新たなパートナーを開拓し、寄付金の仕組みを構築していくことで安定的な財政基盤を確立し、地域にインパクトを生むような効果的な事業を永続的に構築してまいりましょう。

【伝統を礎に、新時代の組織へ】

水戸青年会議所は今年で74年目を迎えます。これまでの歴史で培われてきた伝統や文

化は次代に継承をしていかなければなりません。しかし、「変わらないために変わる」という視点も必要ではないでしょうか。めまぐるしく変わる社会情勢や人々の意識、デジタル技術の発達による DX 化など、時代の流れを読みながら、世の中の変化を先取りし、体質を変え、環境の変化に適応していかなければ組織としては衰退してしまいます。現代の組織に必要とされていることは何か、ひとを活かせる組織とは何か、効率的な組織運営とは何かを改めて問い直し、定款や諸規定も現在の時代に適しているのかを改めて議論していかなければなりません。また、青年会議所は単年度制で役割や環境も変わっていきますが、育成の取り組みは本当に十分といえるでしょうか。組織として、人材育成により一層の重点を置く必要があります。そのために、メンバー一人ひとりの特性を踏まえ、必要なスキルを明確にしたうえで、計画的な指導や研修を実施し、学びの場を創出していきましょう。こうした取り組みにより、主体性と意欲を兼ね備え、自律的に行動できる人材の育成を実現してまいりましょう。そして、メンバーのモチベーション向上や維持は、青年会議所活動への意欲や生産性に大きく関係します。褒章制度の見直しも必要です。メンバーに対して結果だけでなくプロセスも評価するなど、「こうすれば評価される」と努力する方向性を分かりやすく提示することや理念や運営方針に基づいた基準に沿って正当な評価をすることが重要です。メンバー一人ひとりが、明確な目標をもって青年会議所活動に取り組む環境を整えてまいりましょう。さらに、青年会議所は単年度制を採用していることから、知識の共有が困難なため属人化しやすい傾向にあると私は思います。属人化の課題を整理し、属人化解消のために必要な情報（ナレッジ）をどのような目的・内容で作成し、またそれをどのように活用・展開していくかといった、最適化のためのナレッジマネジメントの実践が重要です。ナレッジマネジメントの適切な運用によって新たな情報の蓄積と管理を行い、次世代に情報共有できるよう活用してまいりましょう。

【ブランド戦略による情報発信】

組織のブランド価値を高めることは持続的な成長と成功を収めるための重要課題といえます。その戦略的手法として欠かせないのが、「広報」と「ブランディング」です。素晴らしい運動を構築しても多くの人々に知っていただかなければ意味がありません。形成したいブランドイメージを確立し、「こんな認知を形成したい」「こんな共感を得たい」という指針の元、共感をいただけるようなブランディングが必要です。動画やホームページ、SNS など様々なツールを活用しながら、他団体にはない水戸青年会議所の強みを改めて見直し、一貫性のある継続的かつ定期的な情報発信を行ってまいりましょう。

【共感と魅力による持続可能な会員拡大】

現代は、「青年会議所しかない時代」から「青年会議所もある時代」と言われるように、地域のために活動する青年団体は他にも存在しているのが現状です。青年の意識や考え方も時代とともに変化しており、これまで以上に個別・多様化の傾向があります。我々

を取り巻く環境も大きく変化していることから、戦略的な会員拡大が求められています。ターゲット選定や求める人物像を明確にするのは勿論のこと、他団体との違いを分析し差別化を行っていかねばなりません。改めて「水戸青年会議所の強みとは」を皆で考え直し、共通認識として定着させねばなりません。また、拡大における広報についても水戸青年会議所の魅力や価値観を伝え、求める人材に結びつける戦略的なコミュニケーション方法の一つです。「一貫性のあるメッセージ」と「複数の発信チャネルの活用」を考えながら、共感を得られるような情報発信に取り組みましょう。近年、日本は女性が活躍しやすい社会に変わりつつあります。しかし、水戸 J C においては女性メンバーが男性メンバー数に比べ極端に少ないのが現状です。女性メンバーの拡大によって新たな視点の事業構築や組織運営が可能となり、イノベーションが生まれるものと私は思います。多彩な人材が活躍し、一人ひとりがのびのびと個性を出せる状態は、より良い組織を創っていく上で重要なものです。多彩なメンバーが活躍しやすい組織の土台作りも並行して行ってまいりましょう。そして、先輩諸兄姉が築いてきた歴史や伝統をしっかりと継承しつつ、常に新たな出会いと交流を追い求めていく必要があります。多くの交流を生み出し、多くの方々と関係構築する機会を通して水戸青年会議所の魅力を多くの人に伝え、情熱を持ち積極的に活動する人材の拡大を行ってまいりましょう。

【おわりに】

「人生は知らない世界に飛び込むこと。」これは、私が常に心に留めている言葉です。青年会議所での活動は、これまで経験したことのないような新たな挑戦と学びの連続です。楽しいことばかりではなく、ときには困難に直面し、つらい思いをすることもあるでしょう。何もしなければ失敗もしないかもしれませんが、しかし、挑戦を避けていては、得られるものも成長ありません。私は迷った時、曾祖父の生き方を思い返します。曾祖父は、明治 30 年に国後島で生まれ、小学校を卒業する前に東京へ渡り、陶器店で住み込みの店員として働き始めました。17 歳の時、配達中の事故により左足を失うという大怪我を負いました。それでもタクシー運転手を目指し、難関だった自動車免許を取得するも、義足を理由に採用されず、それでも諦めずに自動車整備工として東京の会社に勤め、やがて鉾田の地で独立し、家業の礎を築きました。当時、障害の理解も乏しく、困難の連続だったはずです。しかし曾祖父は、「できない理由」ではなく、「やる理由」に向き合い、生き抜いた。そこには、挑戦する気概と、強い決意があったのだと私は思います。その姿は、時代を超えて、現代を生きる私たち青年にも問いかけています。挑戦する勇気と、社会をより良くしようとする意志があれば、不可能はない。変革や失敗を恐れず、一步を踏み出すことで未来は必ず切り拓かれていく。そう、私は信じています。私たち水戸青年会議所は、先人たちの築き上げてきた伝統を礎に、変化を恐れず挑戦し続け、未来を創る原動力となつてまいります。私たち自身の可能性を信じ、共に進んでいきましょう。